

C-1

ケチュア語アヤクーチョ方言における2つの「来る」： 動詞 *hamu* と方向接尾辞 *-mu* *

諸隈夕子

東京大学大学院人文社会系研究科 言語学研究室

国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員

stellestellas@gmail.com

要旨: 近年の移動表現研究では、話者との位置関係の変化を表す直示の標示パターンが注目されている (松本 2017: 13-15)。ケチュア語アヤクーチョ方言は、直示 TOWARD SPEAKER (話者の方へ) を動詞 *hamu* と動詞接尾辞 *-mu* をはじめとする複数の手段で標示できる。本研究は、アヤクーチョ方言における直示表現の傾向を、この言語で特に頻繁に用いられる *hamu* と *-mu* の2種類の標示手段に着目して記述する。具体的には、映像刺激を用いた実験的手法に基づき、移動のタイプ (主体移動・客体移動・抽象的放射)、経路のタイプ (TO, INTO, UP)、様態のタイプ (WALK・RUN・SKIP・PUT etc.) ごとの *hamu* と *-mu* の使用頻度の違いを分析する。調査の結果、以下の2つの違いが明らかになった。i) *hamu* は移動の軌跡を表現できる移動物が主語に限られるが、*-mu* は主語以外も参照できる。ii) 主体移動に着目すると、*hamu* は主動詞の位置をめぐる経路や様態と競合し、経路/INTO/、経路/UP/、様態/RUN/場面では競合に負けやすいため使用頻度が下がる。一方 *-mu* は動詞接尾辞の位置で経路や様態と競合しないため、どの経路・様態タイプの場面でも出現頻度が一定している。

1 はじめに

近年の移動表現研究では、話者との位置関係の変化を表す直示の標示パターンが注目されている (松本 2017: 13-15)。移動表現の類型論における代表的な研究である Talmy (1991, 2000) においては、直示は経路の一種として分析されている。しかし、経路と直示は、同じ言語の中で大きく異なる特徴を見せることがある。例えば、ドイツ語は経路動詞をほとんど持たないが、直示動詞 *kommen* 「来る」や *gehen* 「行く」はしばしば用いられる (松本 2017: 14)。さらに日本語では、直示と経路は「入って (経路)/来た (直示)」のように、複合動詞の中ではそれぞれ固有の標示位置を取る。このように、多くの言語で直示は経路とは異なる特徴を見せることから、近年の研究では、経路から独立した概念としての直示への関心が高まっている (松本 2017: 14)。

ケチュア語アヤクーチョ方言は、直示の標示手段を豊富に持つ言語である。この言語では、直示の一種である話者へ向かう移動 (TOWARD SPEAKER¹) を (1) 動詞 *hamu* 「来る」と (2) 動詞接尾辞 *-mu* 「こちらへ」をはじめとする複数の手段で表すことができる。

(1) pi-m wak warmi **hamu**-chka-n qawa-wa-spa-raq
who-FOC that woman **come**-PROG-3SG look-1SG.OBJ-SR.SS-CONT
「その女性が私を見ながら**来て**いる」 (話者 ID:01, 動画 ID:01, /TO-WALK/)

(2) maqta-qa kusi-sqa-lla-ña chaya-ra-**mu**-n wasi-n-man
boy-TOP be.happy-NMLZ.REAL-LIM-COMPL arrive-PST-**ven**-3SG house-3SG-DAT
「男の子が喜んで彼の家にやって**来た**」 (話者 ID:01, 動画 ID:06, /INTO-SKIP/)

(1) では、*hamu* が主動詞語根として wak warmi 「その女性」の話者へ向かう移動を表している。(2) では、*-mu* が *chaya-ra* 「着いた」に接続し、移動が話者の方向に向かうことを表している。

* 本稿に関する内容については以下の研究者から貴重な意見および情報をいただいた: 佐々木充文、島健太、鈴木唯、長屋尚典、山本恭裕、吉田樹生 (敬称略)。並びに、本研究の遂行に際し実験に協力頂いた 11 名のアヤクーチョ方言話者の方々に心から謝意を表す。無論、本稿の誤りは全て著者の責任である。本研究は JSPS 科研費 JP21J13736 (代表: 諸隈夕子)、JP19H01264 (代表: 松本曜)、および 2019 年度布施学術基金学術奨励費 (若手研究者研究費) の助成を受けたものである。また、本研究は国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」(代表者: 窪田晴夫) の研究成果である。

¹ 本発表では、各標示手段が示す移動概念を TO, WALK, TOWARD SPEAKER のように英字大文字、動画で表現される移動概念を /TO/, /WALK/, /TOWARD SPEAKER/ のようにスラッシュで囲んだ英字大文字で表記する。

重要な点として、*-mu* は様々な動詞に接続することができるが、*hamu-mu* のように *hamu* に接続することはできない。そのため、この言語で直示 TOWARD SPEAKER を 1 つの動詞句で表現する場合、直示標示としては *hamu* と *-mu* のどちらか 1 つを選択する必要がある。

この類似した意味を表す 2 種類の直示標示 *hamu* と *-mu* が、アヤクーチョ方言の直示標示全体の傾向にどのように寄与するかは未解明である。移動表現における直示表現の研究では、動詞と側置詞句の使い分けが研究されている (Matsumoto et al. 2017) 一方、動詞接尾辞についてはクプサピニ語 (Kawachi 2021) などのように詳細な研究のある言語は限られている。直示動詞接尾辞を持つアヤクーチョ方言の直示標示のパターンは、直示標示の類型論に新たな視点を提示することができる。

このような背景から本発表では、アヤクーチョ方言の移動表現における直示標示のパターンを分析する。具体的には、映像刺激を用いた実験的手法に基づき、*hamu* と *-mu* がそれぞれ異なる移動タイプ (主体移動・客体移動・抽象的放射)・経路タイプ (TO, INTO, UP)・様態タイプ (WALK, RUN, SKIP) の場面ごとにどのような使用頻度を見せるかを分析する。そして、この使用頻度の違いが示す *hamu* と *-mu* の類型論的特徴を論じる。

本稿の構成は以下の通りである。第 2 節は、本研究で用いた実験的手法を紹介する。第 3 節は調査結果に基づき、*hamu* と *-mu* の使用頻度の傾向を i) 移動のタイプ、ii) 主体移動における経路と様態のタイプの 2 点に着目して記述する。第 4 節では *hamu* と *-mu* の使用頻度の違いが示す類型論的特徴を議論する。第 5 節はまとめである。

2 調査手法

表 1: 各動画が表す移動タイプ・経路タイプ・様態タイプ

動画 ID	移動タイプ	移動物	経路タイプ	目標地点	様態タイプ
01	主体移動	人間	/TO/	話者	/WALK/ (歩く)
02	主体移動	人間	/TO/	話者	/RUN/ (走る)
03	主体移動	人間	/TO/	話者	/SKIP/ (スキップする)
04	主体移動	人間	/INTO/	小屋の中	/WALK/ (歩く)
05	主体移動	人間	/INTO/	小屋の中	/RUN/ (走る)
06	主体移動	人間	/INTO/	小屋の中	/SKIP/ (スキップする)
07	主体移動	人間	/UP/	階段の上	/WALK/ (歩く)
08	主体移動	人間	/UP/	階段の上	/RUN/ (走る)
09	主体移動	人間	/UP/	階段の上	/SKIP/ (スキップする)
10	客体移動	ボール	/TO/	話者	/KICK/ (蹴る)
11	客体移動	ボール	/INTO/	小屋の中	/KICK/ (蹴る)
12	客体移動	ボール	/UP/	段差の上	/KICK/ (蹴る)
13	客体移動	椅子	/INTO/	小屋の中	/CARRY/ (抱える)
14	客体移動	ノート	/INTO/	鞆の中	/PUT/ (持つ)
15	客体移動	人間	/INTO/	小屋の中	/CALL/ (呼ぶ)
16	抽象的放射	視線	/INTO/	建物の中	/LOOK/ (見る)

本発表の分析は、実験的調査の結果に基づく。具体的には、移動表現の多言語比較研究プロジェクトである Motion Event Descriptions across Languages (MEDAL) プロジェクト (代表: 松本曜) で使用される実験キット「A 実験」による調査を行った。この実験キットでは、移動のタイプ (主体移動・客体移動・抽象的放射)²・経路のタイプ (TO・INTO・UP)・様態のタイプ (WALK・RUN・SKIP・PUT etc.) がそれぞれ異なる

移動事象を表す 51 のビデオクリップを刺激として用いる。実験ではこれらのビデオクリップを話者に提示し、その内容を口頭で説明してもらった。

本研究では、直示タイプが TOWARD SPEAKER であり、移動・経路・様態のタイプが異なる 16 の動画に対する回答を分析の対象とする。表 1 は、各動画の移動タイプ・経路タイプ・様態タイプをまとめたものである。表 1 に示すように、本研究では主体移動は 9 種、客体移動は 6 種、抽象的放射は 1 種の動画を分析の対象とした。

図 1 は、実験で使用した「移動タイプ:主体移動-経路:INTO-様態:RUN」を示す動画 (動画 ID:05) と、それを提示する実験キットのスクリーンショットである。図 1 に示す動画では、男性が (主体移動) 走って (様態 RUN) 小屋の中へ (経路 INTO) カメラつまり話者の視点に向かって (直示 TOWARD SPEAKER) 移動している。

実験はペルー (アヤクーチョ市街地) と東京で行った。実験協力者は 10 代から 60 代の男女 11 人である。11 人のうち 10 人はアヤクーチョ在住の話者であり、アヤクーチョ方言とスペイン語の流暢なバイリンガルである。1 人はアヤクーチョ方言とスペイン語に加え、日本語も使用する。

² 本稿における移動のタイプとは、各動画で着目する移動物の移動が自律的に起きるか (主体移動)、使役事象によって起きるか (客体移動)、疑似的に移動していると解釈されるか (抽象的放射) による分類を指し、言語表現において移動物が主語・目的語・その他のいずれとして表現されるかとは区別する。

この実験で得られたデータに基づき、動画で表現された移動・経路・様態タイプごとに、回答中に *hamu* または *-mu* が使用された頻度を集計した。ただし、主体移動や客体移動場面における *qawa-mu-spa* (look-*VEN-SR.SS*) 「こちらを見て」など、各動画で着目する移動物(表1を見よ)の移動とは関係の無い表現で用いられる *hamu* や *-mu* は集計の対象としない。



3 調査結果

図1: 使用した映像刺激の例

調査の結果、*hamu* と *-mu* は、使われる移動のタイプごとの使用頻度 (3.1) と、主体移動における経路・様態のタイプごとの使用頻度 (3.2) の2点で異なる特徴を見せることがわかった。

3.1 移動のタイプによる *hamu* と *-mu* の使用頻度

hamu と *-mu* は、移動のタイプによって使用頻度が大きく異なる。図2は、移動タイプごとの *-mu* と *hamu* の使用回数を示したものである。各移動タイプの総回答数は主体移動が99、客体移動が66、抽象的放射が11である。各移動タイプにおける1回答あたりの *hamu*、*-mu* の使用頻度は表2の通りである。

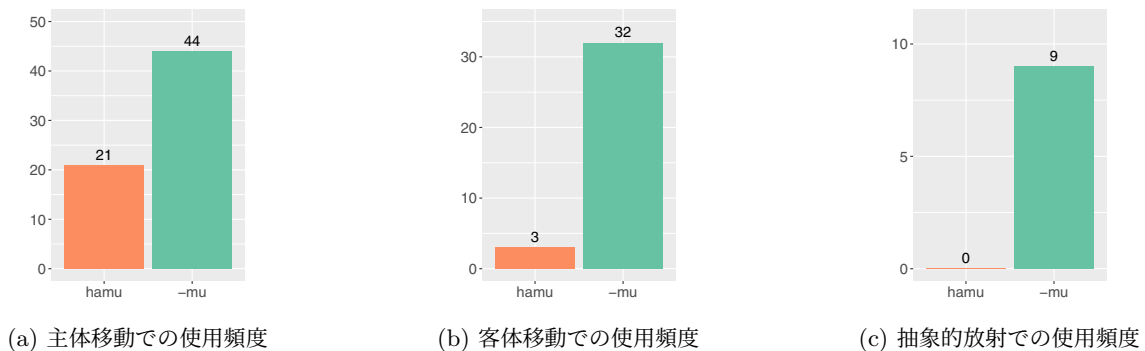


図2: 移動タイプごとの *hamu* と *-mu* の使用頻度

hamu は全体的に使用頻度が *-mu* に比べて低く、(1) のような主体移動の場面での使用が大半である。客体移動においては、/CALL/場面でのみ使用されていた。(3) は/CALL/場面において *hamu* が使用される例である。

表2: *hamu*、*-mu* の1回答あたり使用頻度

	主体移動	客体移動	抽象的放射
<i>hamu</i>	0.21	0.05	N/A
<i>-mu</i>	0.44	0.48	0.82

- (3) amiga-y Maria-ta qaya-pti-n Maria **hamu**-n pabellon-man
friend-1SG Maria-ACC call-SR.DS-3SG Maria **come**-3SG pavilion-DAT

「私の友達がマリアを呼び、マリアが小屋に**来る**」(話者 ID:05 動画 ID:15, /INTO-CALL/)

(3) では、移動物の *Maria* は副詞従属節内で目的語、主節内で主語として現れている。客体移動における *hamu* は、(3) のように着目する移動物を主節の主語に取る構文でしか使用されず、そのような構文は/CALL/場面では使われなかった。このように *hamu* は主体移動と一部の客体移動で用いられるが、抽象的放射では一度も使われなかった。

一方、*-mu* は全ての移動タイプで使われる。(4) (5) (6) はそれぞれ主体移動・客体移動・抽象的放射の場面で *-mu* が使われる例である。

(4) ñan-ta-kama-m huk qari kallpa-**mu**-chka-n
 road-ACC-LIM-FOC a man run-**ven**-PROG-3SG
 「男性が道なりに走って**来て**いる」(話者 ID:03 動画 ID:02, /TO-RUN/)

(5) amigo-y pelota-ta hayta-**mu**-n hawa-manta pabellon uku-man
 friend-1SG ball-ACC kick-**ven**-3SG outside-ABL pavilion inside-DAT
 「私の友達が外から小屋の中へボールを蹴**って**くる」(話者 ID:05 動画 ID:11, /INTO-KICK/)

(6) wak warmi-m watiqa-yka-**mu**-n
 that woman-FOC stare-YKU-**ven**-3SG
 「その女性がのぞき**込**んでくる」(話者 ID:06 動画 ID:16, /INTO-LOOK/)

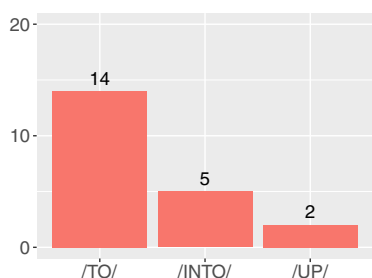
-mu は、主体移動である (4) においては主語である *huk qari* 「男性」、客体移動である (5) においては目的語である *pelota* 「ボール」、抽象的放射である (6) においては項として現れない視線の、話者に向かう移動を表している。

3.2 主体移動における経路・様態のタイプによる *hamu* と -mu の使用頻度

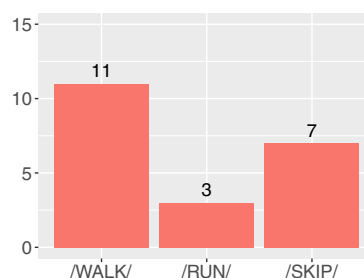
hamu と -mu の使用頻度は、主体移動における経路・様態タイプごとに大きく異なる。本節では、*hamu* と -mu それぞれの経路/TO/、/INTO/、/UP/の間、および様態/WALK/、/RUN/、/SKIP/ごとの使用頻度を観察する。

3.2.1 *hamu* の使用頻度

hamu は、経路タイプとしては/INTO/、/UP/場面、様態タイプとしては/RUN/場面で、その他の経路・様態タイプに比べて使用頻度が低くなる。図 3 は主体移動における経路・様態タイプ (各経路・様態タイプの全回答数は 33) ごとの *hamu* の使用頻度を示したものである。



(a) *hamu* の経路タイプごとの使用頻度



(b) *hamu* の様態タイプごとの使用頻度

図 3: 経路タイプ・様態タイプごとの *hamu* の使用頻度

各経路・様態タイプにおける 1 回答あたりの *hamu* の使用頻度は表 3 の通りである。

表 3: 経路タイプ・様態タイプごとの *hamu* の 1 回答あたり使用頻度

(a) 経路タイプごとの *hamu* の使用頻度

/TO/	/INTO/	/UP/
0.42	0.15	0.06

(b) 様態タイプごとの *hamu* の使用頻度

/WALK/	/RUN/	/SKIP/
0.33	0.09	0.21

3.2.2 -mu の使用頻度

hamu とは逆に、-mu は/INTO/、/UP/、/RUN/場面では他の経路・様態タイプ場面に比べて出現頻度が高くなる。さらに、経路・様態ごとの使用頻度の差は、*hamu* に比べて小さい。図 4 は経路・様態タイプ (各経路・様態タイプの全回答数は 33) ごとの -mu の使用頻度を示したものである。

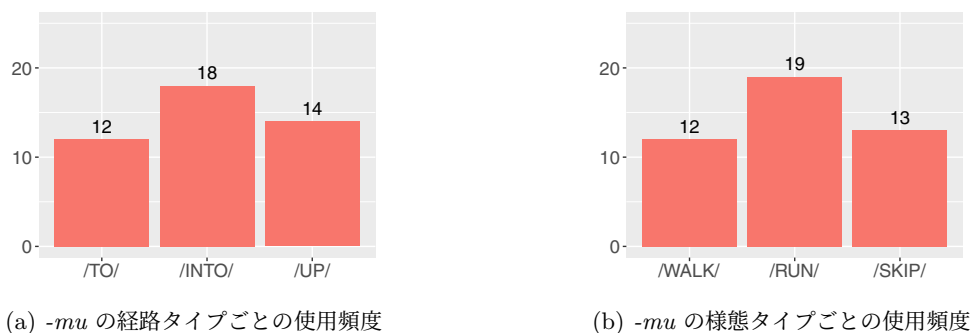


図 4: 経路タイプ・様態タイプごとの -mu の使用頻度

各経路・様態タイプにおける 1 回答あたりの -mu の使用頻度は表 4 の通りである。

表 4: 経路タイプ・様態タイプごとの -mu の 1 回答あたり使用頻度

(a) 経路タイプごとの -mu の使用頻度			(b) 様態タイプごとの -mu の使用頻度		
/TO/	/INTO/	/UP/	/WALK/	/RUN/	/SKIP/
0.36	0.55	0.42	0.36	0.58	0.39

4 議論

4.1 軌跡を参照する移動物

hamu と *-mu* が表す直示概念は、対象とする移動物の文法関係が異なる。3.1 で見たように、*hamu* は軌跡を表現できる移動物が (1) や (3) のように「(こちらへ移動する) 女性」のような主語に限られている。逆に、「本をカバンの中に入れる」における「本」や「部屋の中を見る」における視線のように、主語にならない移動物の移動は *hamu* で表現することができない。そのため、*hamu* は移動物が主語として現れうる、i) 主体移動と ii) 客体移動のうち /CALL/ 場面でのみ現れる。一方 *-mu* は、(4) のような主語のみならず (5) のように目的語や (6) のように視線など項とならない移動物の軌跡も表現することができる。そのため、*-mu* は移動物が主語として現れる主体移動、主に目的語として現れうる客体移動、項として現れない抽象的放射の全ての移動タイプで用いられる。

アヤクーチョ方言の動詞と動詞接尾辞による直示標示の差は、直示の類型論における、移動物が表現される文法関係の重要性を示す。直示表現の研究では、各標示で参照される空間の違いが着目されている (Matsumoto et al. 2017)。例えば日本語やタイ語では、「来る」などの直示動詞は「こちらに」などの側置詞句と異なり、厳密に話者へ向かう移動のみならず「話者のいる階へ降りる」のような機能的空間への移動も標示できる。アヤクーチョ方言の直示表現は、このような空間の違いだけでなく、移動物の文法関係という新たな観点を直示の類型論に提示する。

さらに、*hamu* と *-mu* が表せる移動物の文法関係の差は、この言語の動詞接尾辞は動詞よりも抽象的な直示概念を表せることを示す。この動詞接尾辞と動詞の関係は動詞が側置詞句よりも抽象的な直示概念を表せることを指摘した (Matsumoto et al. 2017) とは対照的であり、直示標示の類型論的研究における動詞接尾辞の重要性を示す。

4.2 直示標示と経路・様態標示の競合

3.2 で見た通り、*hamu* と *-mu* は、主体移動における経路・様態タイプごとの使用頻度の高低のパターンが異なる。*hamu* は /INTO/、/UP/、/RUN/ 場面での他の場面よりも使用頻度が低い。*-mu* は経路・様態タイプごとの使用頻度の差が *hamu* に比べて小さく、*hamu* とは逆に /INTO/、/UP/、/RUN/ 場面での使用頻度が他の場面より高い。

hamu と *-mu* それぞれの経路・様態タイプごとの使用頻度を多重ロジスティック回帰分析³ によって分析したとこ

³ 各経路・様態タイプの全回答における *hamu* 使用の有無 (有: 1, 無: 0) を目的変数とし、/TO/ を基準とした経路タイプ (/INTO/、

ろ、*hamu* は、経路/INTO/場面、経路/UP/場面、様態/RUN/場面では、その他の経路・様態場面に比べて有意に使用頻度が低いことがわかった。一方、*-mu* の経路・様態タイプごとの使用頻度に有意差は見られなかった。つまり、*hamu* は表現したい移動事象の経路・様態のタイプによって使われやすさに大きな違いがあるが、*-mu* はどのような経路・様態が伴う場合でも使われやすさが一定している。

このような経路・様態タイプによる *hamu* と *-mu* の使用頻度パターンの違いは、主動詞と動詞接尾辞それぞれの位置での直示標示と経路・様態標示の競合という観点から説明できる。A 実験の結果において、/INTO/、/UP/場面は経路動詞、/RUN/場面は様態動詞が主動詞を占めることが多い。図 5 は主体移動の経路タイプ・様態タイプごとに、各 33 回答のうち直示動詞・経路動詞・様態動詞・その他の動詞⁴それぞれが主動詞を占める割合を示したものである。

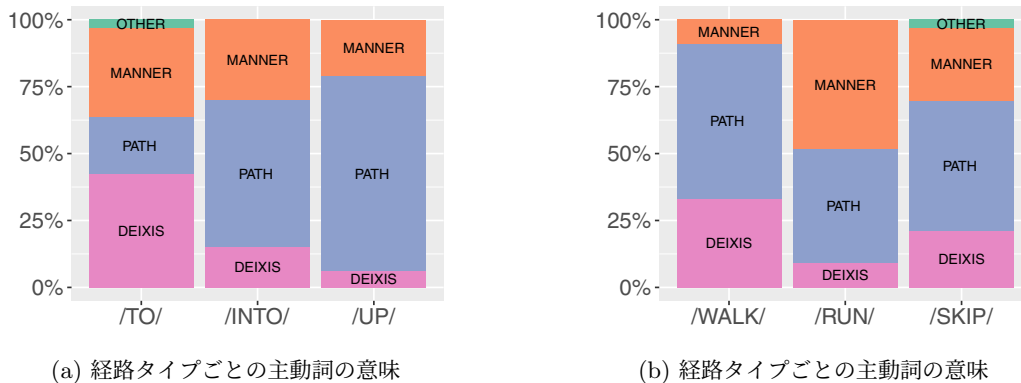


図 5: 経路タイプ・様態タイプごとの、主動詞を占める動詞の意味

図 5 に示す通り、/INTO/、/UP/場面では経路動詞が主動詞として使われる比率が/TO/場面に比べて高い。同様に、/RUN/場面では様態動詞が主動詞として使われる比率が/WALK/、/SKIP/場面に比べて高い。

経路動詞や様態動詞が主動詞で使われた場合、*hamu* はどの位置でも使われなかった。*hamu* は文法的には主動詞以外の位置でも使われ得るが、実際に主動詞以外の位置で各動画で着目する直示移動の標示として使われることはなかった。(7) は、副詞従属節内で *hamu* が使われる例である。

- (7) wak warmi-m punku-man **hamu**-yku-spa qawa-ka-mu-chka-n
 that woman-FOC door-DAT **come**-YKU-SR.SS look-REFL-VEN-PROG-3SG
 「その女性が来て、こちらを見ている」(話者 ID:09 動画 ID:16, /INTO-LOOK/)

本稿で分析した主体移動全 99 回答のうち、71 例 (71.7%) が単文、28 例 (28.3%) が複文だった⁵。しかし、副詞従属節内の *hamu* は全て、抽象的放射場面における人物の移動など、各動画で着目する直示移動とは関係の無い直示移動表現として使われていた。つまり、経路動詞や様態動詞が主動詞になりやすい/INTO/、/UP/、/RUN/場面では、*hamu* が主動詞になりやすく、従属節内でも使われないため、使用頻度が他の場面に比べて有意に低くなる。

このことは、アヤクーチョ方言では直示/TOWARD SPEAKER/が有標な経路や様態に比べて主動詞における標示の優先度が低いことを示す。人間を移動物とした最も無標な主体移動事象は、歩いて (様態/WALK/) ある到達点に移動する (経路/TO/) 事象であり、歩きに比べてエネルギーを要する様態/RUN/や/SKIP/は/WALK/に比べて

/UP/)、/WALK/を基準とした様態タイプ (/RUN/、/SKIP/) のそれぞれを説明変数とする多重ロジスティック回帰モデルを *hamu* について用い、*-mu* にも同様の統計モデルを適用した。R 上の具体的なモデル化のコマンド (例として *hamu* のモデル) は以下の通りである。

```
glm(use_of_hamu ~ path type + manner type, data = ven_self_data, family = 'binomial')
```

この統計分析には R(R Core Team 2020) を使用し、有意水準は 5% 未満とした。この多重ロジスティック回帰分析の結果、*hamu* の有無についてオッズ比 (95% 信頼区間) が統計的に有意であったのは、経路が/INTO/(-2.46, CI: 0.06 - 0.89, p = 0.013)、経路が/UP/(-3.12, CI: 0.01 - 0.32, p = 0.002)、様態が/RUN/(-2.45, CI: 0.03 - 0.52, p = 0.014) の 3 つの条件だった。一方 *-mu* の有無は、どの経路・様態場面にも有意差が認められなかった。

⁴ コピュラ動詞 *ka* が使われていた。

⁵ 重文による回答は見られなかった。

有標な様態、内外の境界や上下の基準を含意する経路/INTO/や/UP/は/TO/に比べて有標な経路と解釈できる。アヤクーチョ方言において直示/TOWARD SPEAKER/はこれらの有標な経路・様態のうち/INTO/、/UP/、/RUN/よりも主動詞での標示の優先性が低く、無標な経路、様態である/TO/場面または/WALK/場面で使用されやすい。

一方、動詞接尾辞の位置では経路・様態・直示が競合しない。経路を表す動詞接尾辞-*yku* (‘into’, ‘to’)⁶ は-*mu* と別のスロットに現れ、(8) のように共起可能である。

- (8) huk warmi apurawllamanña asu-**yka-mu**-wa-chka-n
 a woman hurriedly approach-**yku-ven**-1SG.OBJ-PROG-3SG
 「女性が急いで近づいて**来**ている」(話者 ID:11 動画 ID:01, /TO-WALK/)

さらにアヤクーチョ方言は様態を表す動詞接尾辞を持たないため、動詞接尾辞の位置で直示と様態が競合することは無い。よって、-*mu* はどのような経路タイプ・様態タイプでも現れることができる。このため、-*mu* は *hamu* と異なり、使用頻度が様態や経路のタイプによる使用頻度の差に有意差が見られない。

5 結論

本研究は、アヤクーチョ方言における直示表現の傾向を、直示標示の中でも動詞 *hamu* と動詞接尾辞-*mu* の移動タイプ・経路タイプ・様態タイプごとの使用頻度の差に着目し、実験的手法に基づいて記述した。その結果、*hamu* と-*mu* は、i) 参照できる移動物が主語のみである前者と主語・目的語・それ以外も含む後者という形で異なり、ii) *hamu* は主動詞の位置をめくり経路や様態と競合する結果、/INTO/、/UP/、/RUN/場面では有意に使用頻度が下がる一方、-*mu* は経路や様態と競合しないため、どの場面でも使用頻度が一定していることがわかった。この分析は、直示標示の使用頻度を移動のタイプや経路・様態のタイプごとに観察できる実験的手法でこそ可能になった。

略号一覧

1SG	first person singular	3SG	third person singular	ABL	ablative	ACC	accuative	COMPL	completative
CONT	continuative	DAT	dative	FOC	focus	LIM	limitative	NMLZ	nominalizer
OBJ	object	PROG	progressive	PST	past	REAL	realis	REFL	reflexive
SR	switch reference	SS	same subject	TOP	topic	VEN	venitive	YKU	suffix -yku

参考文献

- Kawachi, Kazuhiro. 2021. The ‘along’-deictic-directional verb suffix complex in Kupsapiny. In *Associated Motion*, ed. Antoine Guillaume and Harold Koch, 747–778. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Matsumoto, Yo, Kimi Akita, and Kiyoko Takahashi. 2017. The functional nature of deictic verbs and the coding patterns of deixis: An experimental study in English, Japanese, and Thai. In *Motion and Space across Languages*, ed. Iraide Ibarretxe-Antunano, 95–122. Amsterdam: John Benjamins.
- R Core Team. 2020. R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing.
- Talmy, Leonard. 1991. Path to realization: A typology of event conflation. *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 17:480–519.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics, Vol. II: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 松本曜. 2017. 「移動表現の類型に関する課題」松本曜 (編) 『移動表現の類型論』 1–24. 東京: くろしお出版.

⁶ 動詞接尾辞-*yku* は-*mu* をはじめとする一部の動詞接尾辞の前では異形態-*yka* を取る。